

この間三日はかかる。炎天下の中を飲まず食わずで三日間歩かされたことであろう。死者も病人もでたであろう。降伏兵たちを運ぶトラックもない。これが世に言う「バターン半島死の行進」である。軍司令官(第十四軍)木間中将はこの責任をとらされて処刑される破目になったが、当時は夢にもそのようなことは考えられなかった。

それよりも全く戦意をなくしたアメリカ兵の大軍を見て、こんな奴と戦争をしていたのか、遠く故郷を離れ、両親や肉親とも離別して命がけの戦争をしていることがむなししいものを感じられてならなかった。ただ一つ言えることは、第二次バターン攻略戦において、敵兵の降伏したアメリカ兵の大軍をまず最初に受け取ったのは歩兵第九連隊第一大隊第一小隊第四分隊(擲弾筒分隊)の一人であったことを知るものは少ない。そしてバターンの敵陣地は第一線、第二線、第三線と三段構えになっていて、第一線は比島兵であった。顧みて思うことは、降伏したのがほとんどアメリカ兵であったところから推察すると、第二線ないし、第三線陣地の敵兵が降伏したことになる。逆の見方をするならば、日本軍は敵の陣地の

相当奥深くに侵入していたことになるのである。

ちなみに敵の最高指揮官はウエンライト少将であった。

上海戦は輜重 満州は山砲隊

愛媛県 相原良光

私は大正二年生まれで、召集は平井さんと一緒だが、昭和八年徴集兵で甲種合格、その年の十二月に普通寺の輜重第十一連隊へ入営したのですが、輜重兵だったので、三か月勤務して除隊です。

支那事変が勃発したため、昭和十二年八月二十二日と記憶するが山砲十一連隊に充員召集され、段列編入されて二十四日動員完結、徒歩で詫間(馬を連れて)へ、二十六日出帆して上海の呉淞へ、八月三十一日貴腰瀉へ敵前上陸し、九月一から十五日間は羅店鎮の攻撃です。

敵は丘に陣地を構えて、上から激しく射撃するので各隊は苦戦しました。台湾の重藤部隊は敵にやられて後退して来て、我々山砲の後へ着いてしまった。朝起きて見

たら山砲が第一線になっていた。

松山の歩兵二十二連隊（長津部隊）は凄いい犠牲を出し、膠着、混戦で、歩兵も砲兵も輜重も、工兵も、同じ所にいたぐらいです。

そのころ、嘉定の敵の要塞砲が盛んに撃ってくるので皆伏せた。ところが幸い不発弾が多くて炸裂しないので随分助かった。

十五日間は飲料水も不足したので、死人の浮いているクリークの水で米を洗い、飯盒で炊いていた。羅店鎮がなかなか落ちない、犠牲は増えるというので、工兵隊がクリークの下に坑道を掘って突撃してとうとう占領することが出来たのです。

それからは小南翔、南翔が陥落、嘉定へ出て追撃戦となった。南翔から太倉間の追撃戦で、その間ものすごく敵兵が死んでいた。我が軍の戦車の機関銃の射撃で折り重なって死骸が累々としていました。それを越えて前進して行きました。

嘉定が落ちてからは比較的スムーズに行った。進撃が早くて食糧輸送部隊が遅れ、食糧もなく、軍の指令で微

発しても必ず代金を支払うことでしたが、避難民は見当らず、いろいろ探してみると、クリークに舟を浮かべ避難していた。それらに食糧提供の金銭を見せて買うのですが玄米しかない。それを持ち帰って隊で飯盒で炊くけれど飯はバラバラ、その上おかずは塩だけ、煙草はなくて戦友の中には新聞紙を巻いて火をつけ煙草のように吸っているものもいた。将校が捨てた煙草の吸がらを我先に拾い口にもっていったと思ったら取られ、またそれを吸うこともなく次ぎに回り、何人も吸うことができなくなるような場面もありました。

そんな状態が続いているうち、十一月二十六日無錫が陥落して、第五師団の歩兵部隊と一緒に無錫城内に突入したのですが、その時、五師団の下士官から声をかけられた。見たら同郷の二つ上の先輩でした。先輩は私が煙草がないのを知って「ほまれ」という軍隊の二〇本人り煙草をくれました。この時ほど嬉しかったことはなくなっていました。

無錫を占領してから上海に戻ったのですが、この前の

上海事変の時は嘉定を落したら事変が終わって帰還したので、満期になって帰れると思っていた。十二月八日無錫を出発、十五日上海に到着、十七日呉淞から乗船していよいよ帰国と喜んだ。

ところが乗船後、部隊長より訓示で「我々は南方へ行く予定であったが、英国の権域だから陸軍は上がれぬ、事態が変わって台湾の高雄港の南の海岸に上陸する」。私たちは乗船するまで分からなかった。そして十三年正月は水泳正月となり、三か月待機して三月十一日復員下令で、高雄港を出発して十八日に坂出上陸、同日原隊山砲第十一連隊帰着して、三月二十五日招集解除して帰宅したので。

上海敵前上陸から大場鎮、羅店鎮、嘉定、無錫と厳しい戦闘を続けた。短い期間でしたが、第十一師団もたぐさんの犠牲者を出しました。

昭和十六年七月十七日、臨時召集で山砲兵第五十五連隊に応召、同日山砲十一連隊整備隊要員充用として満州派遣、八月四日坂出港を出発して、七日釜山上陸、九日釜山出発、十三日東安省虎林到着、同日山砲第十一連隊

第三中隊本部編入と同時に虎林付近戦時防衛勤務、と軍隊手帳に書かれています。

部隊はこれまで少数の現役兵の部隊だったのですが、いわゆる「関特演」で大勢の召集兵が入ってきたわけです。そのため、準備も不十分だったのか半年ぐらいは食事も充分でなくて、戦友の中には厩使役に行つて馬の主食の豆粕を割つて食べ、日夕点呼の時、口から豆粕が飛び出して週番下士官に見つかり「馬の上まえをはねた」とビンタを受けることもありました。

また、下士官の残飯などを奪い合う風景もしばしば見受けられました。そんな状態だったから、休日には必ず外出して、一週間分の不足をと、腹一杯食べて満足することもしばしばありましたが、日が経つにつれてそんなこともだんだんとなくなりました。

我々の一番の苦勞は、夏の湿地演習。冬は小便も凍る冬季演習である。夏の湿地演習の時、指揮をしていた少尉どのが湿地にはまって抜けられず、とうとう死亡するなどの悲しい思いもあったし、また冬季、ソ満国境付近での陣地構築も大変つらい思い出の一つでありました。

それでも冬季演習のとき、日本の移民団の家庭を訪問して、ペーチカで暖まりながら話し合う楽しい一時もあったことを思い出します。

虎林に来てから二年半、昭和十八年十二月十一日、山砲第五十五連隊補充隊に転属のため虎林を出発し、十二月十八日善通寺第五十五連隊補充隊に到着、同日第九中隊に配属となり、十二月二十四日付をもって召集が解除された。

上海敵前上陸の実戦と 満州の関特演訓練

愛媛県 平井秀利

私は大正四年生まれで、昭和十年徴収で、第一乙種だったが、支那事変が始まると直ぐ、十二年八月に召集になりました。十一師団の歩兵は、丸亀・松山・徳島・高知ですが、司令部と特科隊（騎・砲・工・輜重など）は全部善通寺です。

上海戦に参加するために、十一師団が動員されたわけで、上海派遣軍として敵前上陸したのですが、輜重が上陸したときはもう弾丸が飛んできました。特に大場鎮や羅店鎮あたりは戦線が膠着状態で、輜重は前線に荷物を運ぶことが出来ないので夜運びました。作戦中は雨が降っていたが昼は動けん。

しかし、大場鎮（肉弾三勇士で有名）、羅店鎮、嘉定が陥ちるまでは苦戦だったが、追撃戦は比較的早かったです。蘇州―無錫と行ったが、蘇州は私たちが行った時はもう陥ちていました。

そして上海に戻ったのですが、そのころは日本商店が帰ってきて、居留民が出迎えてくれました。ところが十二月だというのに、我々には夏の軍服や蚊帳が支給されました。私ははじめから、南方へ行くという噂を聞いて、呉淞で乗船したが、結局は高雄港の南の海岸に上陸した。そこで約三か月間ぐらい待機していたわけですが、昭和十三年三月の下旬、高雄港を出港して坂出に上陸し、三月二十八日ごろだと思いますが召集解除されたわけです。